核実験に参加した母をテーマに映画製作

エム・ティー・シルビアさん(54)

M. T. Silvia

ひと

ドキュメンタリー映画「アトミックマム」を今春完成させた。守秘義務との葛藤を超え娘に核実験の体験を打ち明けた母ポウリーンさん(80)と、広島の被爆女性の2人の人生を重ね合わせた物語だ。

米海軍中尉だった母は、1950年代前半に科学者として核実験に参加した。ネズミを鉛の玉に入れて爆心地に置き、核爆発後に回収して放射線の影響を研究した。

5、6歳の時にヒトラーの映像をテレビで見て「何百万人も殺した悪い人よ」と母から聞かされた。「どうしてそんなことができるのか」と戦争への強い反感がわき、平和に関心を持ち始めた。学生時代に聴いた講演をきっかけに反核運動に参加。「母は何をしていたんだろう」と疑問を抱くようになったが、母から話を聞かせてもらえるまでには長い時間が必要だった。

大学で女性学を学び、卒業後は小学校の教員を目指したが、かなわなかった。ナイトクラブで演奏する友人のバンドを手伝ううち、音響技師として映画関連会社に勤め始めた。

約10年前、核実験の記録を残そうと思いたった。信仰を通じて平和運動に参加するようになっていた母がカメラの前に立った。「熱傷研究のため犬を焼き殺した」と、涙ながらに証言した母を「働く女性が少なかった時代に、23歳の若さで海軍に入り研究を成し遂げた」と誇りに思う。

「核問題がまだ終わっていないことをこの映画で伝えたい」

文と写真・吉富裕倫

米大手アニメ会社「ピクサー」のメディア・システムズ・マネジャー。映画の日本での上映は未定。